

ということで、「PTA・子供会などの青少年育成会」への加入率が一番高かった。50歳前半の年代になると、「健康・スポーツの活動」が高い。団塊後世代は「文化や歴史などの教養的な活動」が高い。団塊の世代は、「町内会や自治会の活動」や「生きがい農業などの活動」への参加が高い。団塊前の、高齢期直前世代の場合、「参加していない」という回答も比較的多く、少し活動が分散する。「65～74歳」の前期高齢期の年代は、「社会的弱者への支援や権利擁護の活動」に一番関わっている。「75歳以上」の後期高齢期の年代が、「町内会・自治会などの活動」、「福祉、環境などのボランティア活動」、「文化・歴史・学習などの活動」に一番関わっている比率が高い。

(2) 地域コミュニティ活動への参加

次に、都市向老高齢世代の地域活動への参加をみると、「全く参加していない」という不参加者は、全体の25.9%で、都市地域の4分の1の住民が地域活動に参加していないが、残りの4分の3は、何らかの活動に参加している。このうち参加の一番高いのは「地域の共同作業」(38.6%)で、ほぼ4割の人々が共同作業に参加する傾向を示していることがわかる。この活動は、女性に比率が高く、男女とも都市の郊外で高い。共同作業に次いで高い比率を示しているのが「町内会・自治会の総会」(37.8%)で、これは男性に多い。都心商工地域では男性の活動が盛んであるが、郊外地域では女性の活動が盛んであることがわかる。次いで参加率の高い活動は、「地域のお祭りや運動会」で、33.0%が参加していた。このような伝統的な活動は、男性の方の参加が多く、地域的には都心の商工地で盛んであった。

表3 年代別にみた地域活動への参加

	全体	40歳代	50-54歳	55-57歳	58-60歳	61-64歳	65-74歳	75歳以上
実数	385	90	45	30	37	36	87	60
地域のお祭りや運動会	33.2	48.9	17.8	26.7	45.9	22.2	31.0	26.7
学校行事	19.2	52.2	17.8	6.7	8.1	-	10.3	8.3
町内会・自治会の総会や集まり	38.4	31.1	31.1	33.3	32.4	36.1	47.1	50.0
地域の共同作業	38.4	25.6	28.9	43.3	45.9	44.4	42.5	48.3
地域の神社やお堂の掃除・修繕	3.9	3.3	-	3.3	-	5.6	6.9	5.0
近所のお葬式の手伝い	13.2	3.3	8.9	10.0	21.6	19.4	12.6	25.0
講の集まり	1.8	1.1	4.4	3.3	-	-	2.3	1.7
田植えの直会・農業用水の管理	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	1.8	2.2	-	-	-	2.8	-	6.7
全く参加していない	25.7	18.9	20.0	36.7	27.0	33.3	31.0	21.7
不明	3.1	1.1	6.7	3.3	2.7	11.1	1.1	1.7

次に、各年代別にみてみよう。「40歳代」は、先ほども触れたように子どもがまだ学齢期であるために、「地域のお祭りや運動会」や「学校行事」への参加は他に比べて高い。そのため地域活動への参加において「全く参加していない」という回答が一番低くなっている。「50-54歳」の年代になると、一挙に学校行事への参加活動が少なくなり、地域の活動は減少する。「55-57歳」の団塊後世代の場合は、36.7%が地域の活動に「全く参加していない」と答え、この年代が一番地域と距離をもった状態になっている。団塊の世代は、地域活動を見て育った世代であるため、地域の祭や地域の共同作業、葬式などの手伝いなどの活動をよくやっている。団塊世代の直前の世代の場合、退職直後でまだ再就職先の仕事に忙しいのかもしれないが、3人に1人しか地域活動に参加していない。前期高齢期の年代になると、地域のお祭りや運動会、地域の町内会活動、お堂の掃除・修繕などへの活動が盛んになる。ただし、この調査では、後期高齢期の年代は地域活動が得意ではない。この年代が町内会などの活動、地域の共同作業、近所の葬式などへの参加率が一番高いのである。

3-2. 各年代の希望する生活

人は高齢期に向けてどのような生活を望んでいるのであろうか。これについてみてみたい。

全体では、「健康に恵まれた生活」(79.0%)を望む人が一番多く、「経済的にゆとりのある生活」(49.6%)、「夫婦関係や家族関係を大切にする生活」(44.7%)、「精神的にゆとりのある生活」(27.5%)、「友人や仲間とのつきあいを大切にする生活」(22.1%)、「好きな趣味に打ち込む生活」(22.1%)などが多い。その他では、「自然とのふれあいのある生活」(13.8%)、「時間的にゆとりのある生活」(10.6%)、「好きな仕事を続ける生活」(9.1%)、「それまでの知識や経験を活かす生活」(7.3%)、「社会のために役立つ生活」(5.2%)、「特になし」(3.1%)、「農林漁業とのふれあいのある生活」(1.3%)、「その他」(0.3%)の順であった。つまり、健康な生活、経済生活、家族生活の順で望まれ、その後で精神的ゆとりや仲間づくりや趣味の世界といったものが希望されることがわかるのである。ただし、健康な生活を望むのは年長者の方で多く、逆に経済生活や家族生活の面では、若い年代の方に多くなる傾向がみられることがわかる。

表4 希望する高齢期の生活

	全体	40歳代	50-54歳	55-57歳	58-60歳	61-64歳	65-74歳	75歳以上
実数	385	90	45	30	37	36	87	60
健康的に恵まれた生活	79.0	76.7	68.9	83.3	73.0	83.3	85.1	80.0
時間的にゆとりのある生活	10.6	6.7	17.8	6.7	2.7	5.6	16.1	13.3
経済的にゆとりのある生活	49.6	61.1	57.8	66.7	62.2	38.9	36.8	35.0
精神的にゆとりのある生活	27.5	32.2	31.1	40.0	21.6	25.0	24.1	21.7
夫婦関係や家族関係を大切にす生活	44.7	52.2	46.7	26.7	40.5	44.4	42.5	46.7
友人や仲間とのつきあいを大切にす生活	22.1	20.0	17.8	13.3	21.6	19.4	27.6	26.7
好きな趣味に打ち込む生活	22.1	21.1	15.6	20.0	24.3	16.7	23.0	30.0
好きな仕事を続ける生活	9.1	8.9	8.9	6.7	16.2	11.1	5.7	10.0
知識や経験を活かす生活	7.3	3.3	11.1	10.0	2.7	8.3	8.0	10.0
自然とのふれあいのある	13.8	7.8	17.8	20.0	16.2	13.9	11.5	18.3
農林漁業とのふれあいのある生活	1.3	1.1	-	-	2.7	-	1.1	3.3
社会のために役立つ生活	5.2	4.4	2.2	3.3	8.1	11.1	4.6	5.0
その他	0.3	-	-	3.3	-	-	-	-
特になし	3.1	-	4.4	-	-	5.6	6.9	3.3
不明	0.3	-	-	-	-	2.8	-	-

こうした希望が年齢的にどう変化するかといえば、まず「40歳代」の年代では、他の年代に比べて「夫婦関係や家族関係」の比率が高く、高齢期に向けて家族の方にウェイトをおいていることがわかる。次に「50歳代前半」の年代は、「知識や経験を生かした生活」と「時間的ゆとり」を望む人がやや多くみられる。団塊後世代の「55-57歳」の年代の場合、女性の比率が多かったことが反映してか、「経済的ゆとり」と「精神的ゆとり」と「自然とのふれあい」を望む人が他と比べて一際多かった。「団塊の世代」は、「好きな仕事を続ける生活」と「社会のために役立つ生活」を望む人が多かった。「61-64歳」の年代は、全体的に他に比べて「社会のために役立つ生活」、「知識や経験を活かす生活」、「自然とのふれあいの生活」を望む人が若干多い。前期高齢期の年代の場合、健康な生活志向を一番強くもち、仲間づくりにも一番関心をもっている。今回は後期高齢期の年代は、他の年代に比べて「好きな趣味に打ち込む生活」と「農林漁業とのふれあい」を望む人が多かった。

では彼ら自身がどのようなレディネス（構え）をもっているのだろうか。以下では自我像という形で各年代の自己の心的意識構造をみてみたい。

表 5 各年代別にみた自我像

	実数	何かに役立ちたい	生活は向上する	自己存在満足度	自己能力発揮	自分の体力には自信がある	新しい知識を受け入れられる	生活満足度	社会的貢献能力	総合点	
										合計値	順位
全体	385	63.1	45.2	66.2	45.7	55.6	69.9	77.9	44.9	468.5	
40歳代	90	65.6	38.8	60.0	46.6	61.1	82.0	76.7	48.9	479.9	3
50-54歳	45	57.7	37.7	55.6	48.9	51.1	77.7	71.1	42.3	442.1	6
55-57歳	30	53.3	66.6	63.3	46.7	53.3	76.7	80.0	46.7	486.6	2
58-60歳(団塊世代)	37	70.2	35.1	86.5	54.0	59.4	70.2	78.4	51.3	505.1	1
61-64歳	36	66.6	36.1	63.9	50.0	55.6	72.2	75.0	52.8	472.2	4
65-74歳	87	58.6	50.6	67.8	42.5	62.0	64.4	78.1	41.3	465.3	5
75歳以上	60	68.3	53.4	71.7	38.3	40.0	48.3	85.0	36.7	441.7	7

(備考) 数値は、「そう思う」と「まあそう思う」の合計値である。

(1) 「40歳代」は「新しい知識を受け入れることができる」がトップであるが、知識獲得能力には強い自信をもち、体力面でも自信をもつが、自己能力の発揮や「生活の向上」感についてはあまり高くないのが特徴である。総合点の合計値は479.9点で順位は3位である。年代的には若いので知識獲得能力や体力でカバーしているが、自分の能力の確信に関しては低くなっている。

(2) 「50-54歳」の年代は、まだ年齢的には若いので知識獲得能力をもつが、「体力への自信」が低く、「何かに役立ちたい」や「生活は向上する」や「社会的貢献能力」などのでも低く、また「生活満足度」でも低くなっている。この年代は、年代的な役割のためか、それとも団塊世代、団塊後世代に続いて生まれたが、その世代に席を奪われてきたため、とにかく自己像意識が低い。総合点が6位と、若い年代では一番低くなっている。

(3) 次いで「55-57歳」の年代は、団塊後世代であって、「生活が向上する」と信じており、生活満足度も若い年代層の中では高いのが特徴である。「何かに役立ちたい」というのは一番低く、自分の存在の満足度も低い。ただ、総合点では、2位である。

(4) 団塊の世代の「58-60歳」の年代は、「何かに役立ちたい」、「自己存在満足度」、「自己能力達成度」に関して全年代中で一番高い数値を示し、総合点でも一番高い

値を示す。この年代は、「生活が向上する」という数値が一番低くなっている。団塊世代は、生まれた時期によるのか、それと大量な人口群がそうさせているのかわからないが、ともかく未来を楽観的にみることなく、ひたすら使命感と気力で前進しようとするのがこの年代の特徴である。

(5) 団塊の前の「61-64 歳」の年代は、「社会的貢献能力」を特徴とする。この年代は、「自己存在満足度」と「生活満足度」の方は低くいけれど、「新しい知識獲得能力」をもち、「何かに役立ちたい」という想いで、社会への貢献能力を示そうとする。こうした点で総合点は、4 位である。

(6) 「65-74 歳」の前期高齢期の年代は、「自分の体力には自信がある」という面で最高の数値を示している。「生活は向上する」という思いをもっており、総合点では 5 位である。

(7) 「75-84 歳」の後期高齢期の年代は、「生活満足度」が一番高い年代となっている。この年代は年齢では最高年齢に当たるが、「生活は向上する」が団塊後世代について高く、「何かに役立ちたい」と「自己存在満足度」に関しても団塊世代について高い。他方で、高齢のために「自己能力達成」や「体力」、「新しい知識の獲得」、「社会的貢献能力」面では一番低い数値となっている。そのために総合点は低くなっている。

4. 生涯現役社会づくりの考察

ところで、ここで使う「生涯現役」という言葉は、通常、高齢者を指す場合、「元気老人」、「アクティブ・シルバー」、「アクティブ・エイジング」、「プロダクティブ・エイジング」、などといった言葉と同じ意味で解釈されるが、ここでは 40 歳以降の年代の元気づくりに向かって努力しようとする人々を指している。そして、「生涯現役社会」とは、高齢になった人々が社会の中で「現役」として「みなされ」、また「自分自身も現役だと考えている」、そういう状態が維持できる社会であると規定しておきたい（辻 2003: 21）。それから、生涯現役社会を形成する体制づくりをここでは「生涯現役社会づくり」と呼んでおく。

4-1. 生涯現役指標

最初に生涯現役という状況を見るためにを、各年代別の就労状況、自己実現度、健康意識についてみておきたい。

(1)現在の就労状況

まず、就労状況を見ると、全体では6割強が現在働いており、このうち40代だと89割近く働いているが、「50-54歳」では80.0%、「55-57歳」では70.0%、「58-60歳」では73.0%、「61-64歳」では66.7%、「65-74歳」では34.5%、「75歳以上」では30.0%が働いている。今回の場合、都市部の「75歳以上」が就労しているのは、都心の商店街を入れていることによる。ともかく、就労率は、若い年代に高く、加齢とともに減少する傾向を示している。その中であって「団塊の世代」だけは、就労率が高くなっている。

(2)自己実現度

次に、自己実現度をみるために、ここでは「自分の能力の達成状態」でもって調べてみた。表6は、「能力が発揮できた」と回答した（以下「能力達成」）ものと「発揮できていない」と回答した（以下「能力未達成」）ものを示している。全体では、「能力達成」が45.7%、「能力未達成」が49.9%で、やや「能力未達成」が多いものの、拮抗した関係にあることがわかる。

これをさらに各年代別にみると、「能力達成」が一番高いのは、団塊の世代の「58-60歳」で、次いで「61-64歳」の世代である。能力達成は、団塊の世代をピークに年代が下がるにつれて減少し、年代が上がるにつれて減少する傾向となっている。ただ、団塊後の世代の箇所だけ、低くなっている。この傾向は、団塊世代の固有な要因（意欲的な世代という意味で）によるものか、それとも退職を前にして意識的に生じるものかは、ここではこれ以上究明できない。

表6 各年代別にみた現在の就労状況、自己能力達成度、現在の健康意識

	実数	就労別			自己能力達成度			健康意識			
		有職	無職	不明	能力達成	能力未達成	不明	良好	普通	悪い	不明
全体	385	60.8	37.7	1.6	45.7	49.9	4.4	41.0	39.0	19.0	1.0
40歳代	90	86.7	13.3	-	46.7	52.2	1.1	50.0	32.2	16.7	1.1
50-54歳	45	80.0	20.0	-	48.9	48.9	2.2	33.3	42.2	24.4	-
55-57歳	30	70.0	30.0	-	46.7	46.7	6.7	50.0	40.0	10.0	-
58-60歳	37	73.0	27.0	-	54.1	40.5	5.4	45.9	45.9	8.1	-
61-64歳	36	66.7	33.3	-	50.0	50.0	-	44.4	27.8	22.2	5.6
65-74歳	87	34.5	60.9	4.6	42.5	50.6	6.9	40.2	44.8	13.8	1.1
75歳以上	60	30.0	66.7	3.3	38.3	53.3	8.3	25.0	40.0	35.0	-

(3)健康意識

最後に、健康意識をみると、加齢効果そのまま現れないことがわかる。年代的には、「良好」と答えのうちで高い比率を示したのは、50.0%を示した「40歳代」と「55-57歳」の年代で、逆に低かったのは「75歳以上」の25.0%と「50-54歳」の33.3%である。後期高齢期の年代が健康意識で低くなるのは加齢効果からみて当然であるが、「50-54歳」という若い年代が「良好」が低いのは、この年代に健康意識を下げるものがあるのであろう。団塊の世代の場合は、「良好」が上位の3番目であるが、「悪い」をみると、一番低い比率を示している。その面では、この世代は「良好」に「普通」を加えると、9割強が健康な状態にあるということが出来るであろう。

以上からみると、①就労（働く上での能力やその意欲を引き出す）、②そして自己実現度（能力の発揮度、貢献度）、③自分自身の健康度などは、「生涯現役」を構成する要因で大きく関わっているとみてよいのではないかと思う。そこで、以下では「生涯現役類型」を構成してみたい。

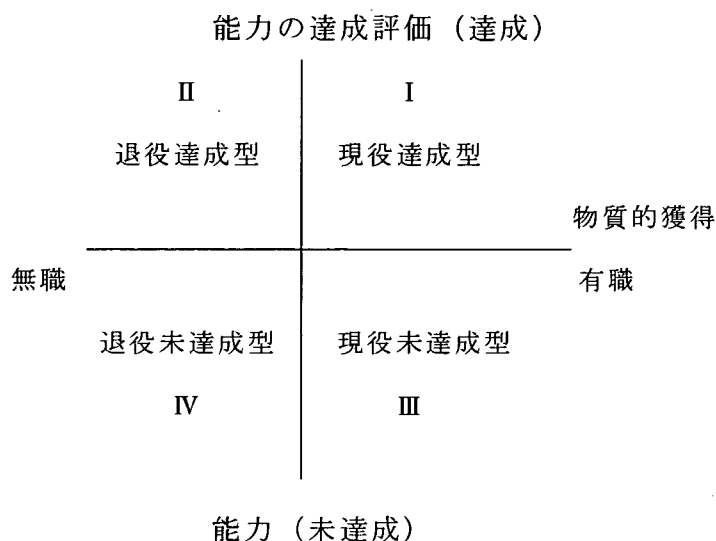
4-2. 生涯現役類型の構成

ここでの分析枠組を指摘しておきたい。これは、2000年に山口県の「生涯現役社会プラン」を策定するにあたりまとめた『生涯現役社会づくりのシナリオ：生涯現役社会づくりに関する基礎調査研究報告書』（山口県長寿社会開発センター）で考察した分析枠組を利用している（辻他 2000）⁽¹⁾。ただし、今回の枠組では、能力軸について変更している。図4は、有能性と職業を軸にして、「生涯現役」を分析するために構成した生涯現役類型である。横軸が「職業」で有職と無職、縦軸が「能力達成」の有無（能力を評価されて自分自身達成感を「もつもの」と「もたないもの」に区分したもの）で、結果的に4つの類型が可能となる⁽²⁾。

調査項目として使用しているのは、「職業」では、現在の仕事の有無について聞いた項目である。能力達成の評価に関しては、ここでは「私の能力は十分生かされている」という項目を使った。この項目の回答肢は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」という4つになるが、操作の関係上「思う」（「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」）、「思わない」（「そう思わない」+「どちらかといえばそう思わない」）に整理し、自分

の能力の達成度があると「思う」と「思わない」ものに分けた。

図1 生涯現役類型のモデル



まず、Iのタイプは、自分の能力の達成評価があると「思う」と答え、有職と答えた人のタイプである。つまり、このIのタイプは、仕事を持ち、自分の能力が生かされているとみているわけで、自分に対する能力の評価に満足した意識をもったタイプといえる。ここでは自分の能力を達成しているという意味合いでこのIのタイプを「現役達成型」と呼んでおきたい。今回の調査では全体の33.1%がこのタイプであった。

IIのタイプは、自分の能力の達成評価があると「思う」と答え、無職と答えた人のタイプである。ここではこのタイプを「退役達成型」と呼んでおきたい。12.0%がこのタイプであった。

IIIのタイプは、自分の能力の達成評価があると「思わない」と答え、有職と答えた人のタイプである。ここではこのタイプを「現役未達成型」と呼んでおきたい。24.9%がこのタイプであった。

IVのタイプは、自分の能力の達成評価があると「思わない」と答え、無職と答えた人のタイプである。ここではこのタイプを「退役未達成型」と呼んでおきたい。24.2%がこのタイプであった。

まず、生涯現役類型の各タイプがどのような基本特性をもっているのかみることから始めたい。

性別にみると、男性の場合、「現役達成型」が 38.5%で一番多く、次いで「現役未達成型」が 29.0%である、後の二つのタイプは、「退役未達成型」が 18.3%、「退役達成型」が 9.5%である。それに比べて女性では「現役達成型」は 29.6%に留まり、それに近い形で「退役未達成型」が 28.7%がみられ、21.8%の「現役未達成型」が続く。一番少ないのは男性と同様に「退役達成型」であるが、13.4%みられ、女性になると多くなる。

表7 性別・年齢別にみた生涯現役類型

		実数	現役達成型	退役達成型	現役未達成型	退役未達成型	不明
	全体	385	33.5	11.7	24.9	24.2	5.7
性別	男性	169	38.5	9.5	29.0	18.3	4.7
	女性	216	29.6	13.4	21.8	28.7	6.5
年齢別	40歳代	90	44.4	2.2	41.1	11.1	1.1
	50-54歳	45	42.2	6.7	35.6	13.3	2.2
	55-57歳（団塊後世代）	30	36.7	10.0	26.7	20.0	6.7
	58-60歳（団塊世代）	37	40.5	13.5	27.0	13.5	5.4
	61-64歳（団塊前世代）	36	41.7	8.3	25.0	25.0	-
	65-74歳（前期高齢期）	87	20.7	20.7	10.3	36.8	11.5
	75歳以上（後期高齢期）	60	18.3	18.3	11.7	41.7	10.0
都心別	都心商工地域	216	39.8	7.9	25.5	21.8	5.1
	都市郊外地域	177	24.9	16.9	24.3	27.1	6.8
男性	都心商工地域	91	47.3	4.4	26.4	18.7	3.3
	都市郊外地域	78	28.2	15.4	32.1	17.9	6.4
女性	都心商工地域	120	35.8	10.0	24.2	24.2	5.8
	都市郊外地域	96	21.9	17.7	18.8	34.4	7.3

次に、年齢別にみると、「現役達成型」は若い年代に多く、40歳代、50歳代、60歳代前半の年代には4割前後みられ、これが65歳以上になると2割前後に減少する。現状ではいまの高齢者たちは60歳の定年で離職する人は少なく、65歳を境に離職者が増大することを示している。「40歳代」では「現役達成型」が44.4%、「現役未達成型」が41.1%みられ、この二つに二分された形になっているが、双方とも加齢に伴って減少する傾向を示している。ただし、この調査では団塊後の「55-57歳」の年代で「現役達成型」が少なく、その分「退役未達成型」がやや多くなっている。「58-60歳」の団塊の世代は、「退役未達成型」が少なく、その分「退役達成型」と「現役未達成型」が多くなっている。

団塊世代の前の、現在、高齢期を直前に控えた「61-64歳」の年代の場合、退役組である「退役達成型」が8.3%しかみられるず、もっと多くなっているのが「退役

未達成型」のタイプである。そして、前期高齢期の年代では、「退役未達成型」が37.5%と、一挙に伸び、さらに「退役未達成型」は、後期高齢期の年代になるとこのタイプは、4割強にまで増大する。

今回の調査は、65歳以上の高齢者ではなく、40歳以上の年代であるので、生涯現役類型も、高齢者だけの生涯現役類型とは大分違った構成比となっている¹⁾。

4-3. 生涯現役社会の条件

それでは、生涯現役社会に必要なものはどのようなものであろうか。ここでは具体的に生涯現役社会に必要な要因を探ることにはしてみたいと思う。集団参加、健康意識、時間意識、暮らし向きに関してみたい。

(1) 集団参加数

集団参加数との関係で生涯現役類型をみると、「0個」と「5個」の箇所を除くと、ほぼ参加数の増加に比例して「生涯達成型」が増加する傾向を示し、有意な関係を示している。「5個」の箇所は実数が少ないので、検証に足る事例とは言えないし、「0個」の箇所は、かなりが申告漏れだとおもう。以上のことを考えると、集団参加数が増加するにつれて「生涯達成型」が増えるといっていよう。

図2 集団参加数別にみた生涯現役類型

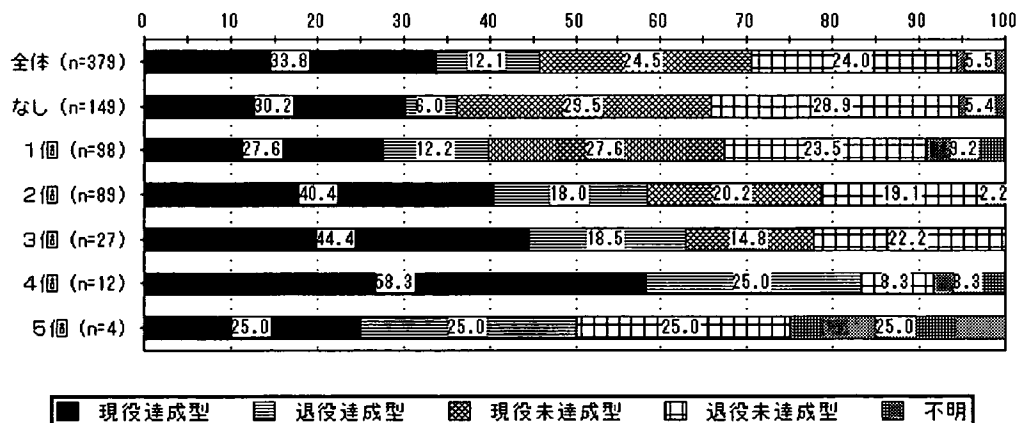
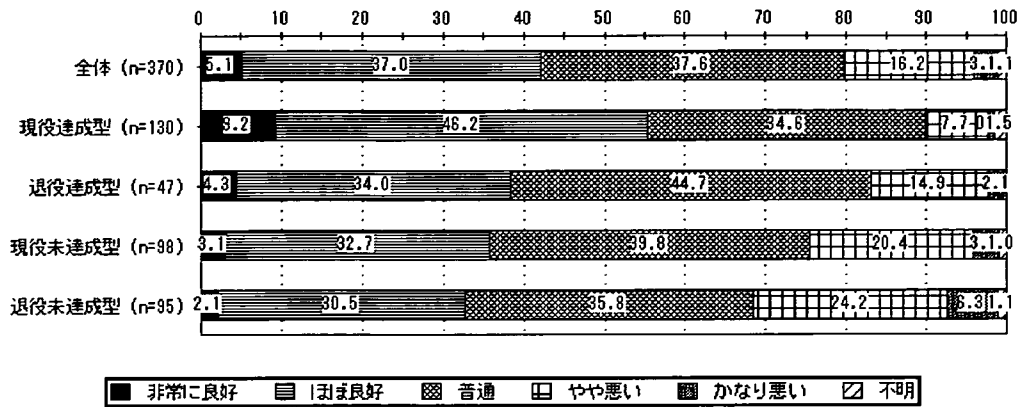


図3 生涯現役類型別にみた健康意識



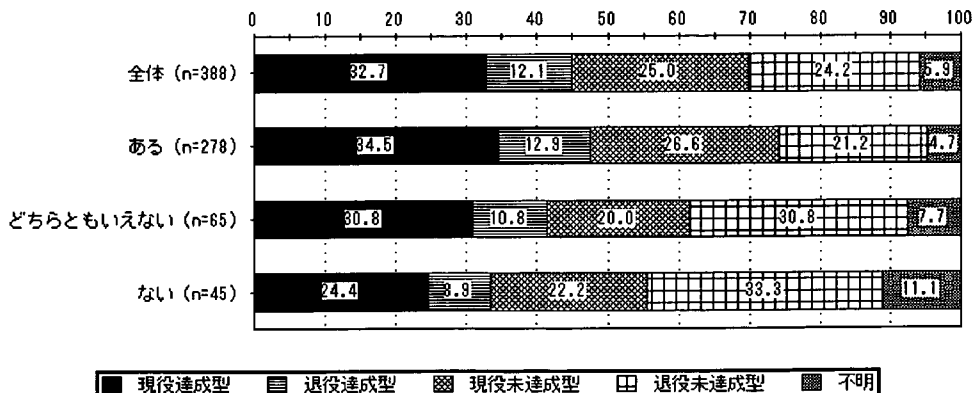
(2) 健康意識

次に生涯現役類型別に現在の健康意識を聞いた設問では、図3のようになる。4類型のうちで「現役達成型」が、健康意識の「良好」（「非常に良好」が9.2%、「ほぼ良好」が46.2%と、一番で多く、以下「退役達成型」、「現役未達成型」、「退役未達成型」の順になっており、明らかに有意な関係が読み取れる。

(3) 時間の速さ意識

次に、時間の速さ意識の項目でみてみたい。「あなたは、『時間がやたらと早く進むな』と思うようなことがありますか」という設問で時間の速さに対する意識（ここでは時間の速さ意識と呼ぶことにする）を聞いたものである。この時間の速さ意識は、都市部ではほぼ45%が「ある」と答えていた。

図4 時間速さ意識別にみた生涯現役類型



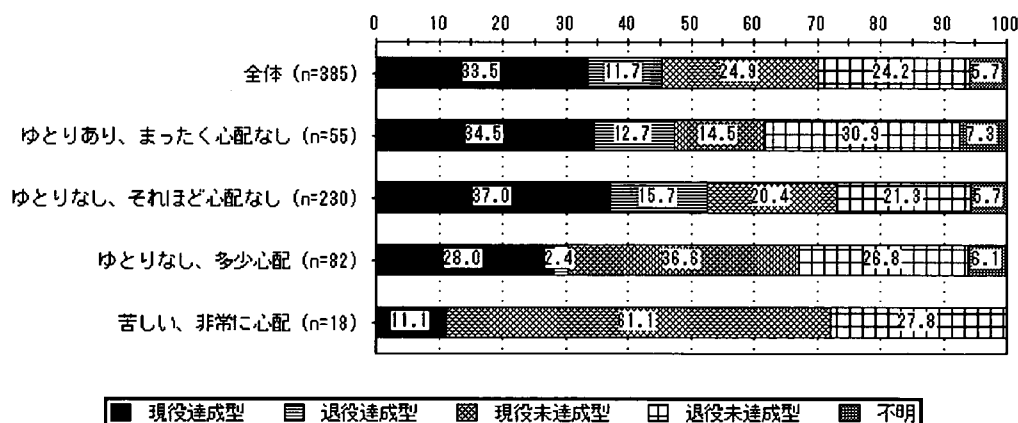
そして「ある」と答えた人に「現役達成型」が 34.5%、「ない」と答えた人に「現役達成型」が 24.4 という具合に、時間の速さ感をもつ人の方に「生涯達成型」が多いことがわかるのである。他の箇所でも見出したように、ここでも時間の速さ感を感じる人ほど元気な傾向が確認できた。

(4) 暮らし向き

「あなたの現在の経済的な暮らし向きはいかがですか。」という設問を使って、生涯現役をみてみたい。この「暮らし向き」に関しては、回答肢としては、「家計にゆとりがあり、まったく心配なく暮らしている」、「家計にゆとりはないが、それほど心配なく暮らしている」、「家計にゆとりはなく、多少心配である」、「家計が苦しく、非常に心配である」を使った。

図5はこの「暮らし向き」別にみた生涯現役類型をみたものである。「生涯達成型」は、「ゆとりなし、それほど心配なし」の箇所で 37.0%と、一番高い比率がでており、それについて「ゆとりあり、まったく心配なし」(34.5%)の箇所で高くなっている。生涯現役になるためには、「暮らし向き」において経済的に不安がない状態が必要なようである。

図5 暮らし向き別にみた生涯現役類型



(3) 生涯現役社会形成の要因連関

では、生涯現役を構成する要因のうちで、要因間の関係はどうなっているのだろうか。この要因連関を調べることは、そのまま相互の関係性のみることにつながるのである。

表8は、生涯現役類型の基本属性と思われる要因と設問での回答肢のならばを示

したものである。

表8 生涯現役類型の基本属性と分析枠組と回答項目の並び

基本属性	分析要因	回答項目の並び
経歴（技能、専門的知識、職場集団）	学歴	1. 中卒……………3. 大卒
家族（配偶者・子ども・親族）	家族形態	1. 1人暮らし……………4. 拡大家族
経済的基盤	暮らし向き	1. 全く心配ない……………4. 苦しく心配
地域社会（社会関係、住みやすさ度）	地域愛着度	1. そう思う…………… 4. そう思わない
健康意識	健康意識	1. 非常に良好……………5. かなり悪い
生きがい感	生きがい感	1. 大いにある……………2. 全くない
集団参加	社会参加数	1. 0個……………2. 5個以上
地域のために何か役に立ちたい	貢献意欲	1. そう思う…………… 4. そう思わない
生涯現役	生涯現役類型	1. 現役達成型…………… 4. 退役未達成型

そして、表8の分析項目の9項目に関しての相関行列を求めたものが、表9である。これからもわかるように、相関係数に有意さが認められるのは36項目のうちで28項目であって、これらのうち有意度の高い**印の項目が17個、有意度のある*印の項目が11個で、全体では8つの要因の間で相関度が高かった。特に「集団参加数」と「生きがい感」(-0.3833)、「地域愛着度」と「生きがい感」(0.3573)、「健康意識」と「生きがい感」(0.3313)、「集団参加数」と「貢献意欲」(-0.3253)の間で0.3以上の相関係数が出ているし、「生きがい感」と「貢献意欲」(0.2993)、「地域愛着度」と「貢献意欲」(0.2876)、「暮らし向き」と「生きがい感」(0.2741)、「健康意識」と「生涯現役類型」(0.2466)、「健康意識」と「生きがい感」(-0.2437)、「生涯現役」と「学歴」(-0.2304)、「集団参加数」と「学歴」(0.2270)、「暮らし向き」と「地域愛着度」(0.2080)の間でも0.2以上の相関係数が出ている。この他0.1以上の数値で5%で有意を示すのが、「学歴」と「暮らし向き」、「学歴」と「生きがい感」、「学歴」と「貢献意欲」、「家族形態」と「健康意識」、「暮らし向き」と「健康意識」、「暮らし向き」と「集団参加数」、「暮らし向き」と「生涯現役」、「地域愛着度」と「健康意識」、「地域愛着度」と「集団参加数」、「地域愛着度」と「生涯現役」、「健康意識」と「貢献意欲」、「貢献意欲」と「生涯現役」、「貢献意欲」と

「生涯現役」の間である。ここで、中心になる生涯現役類型は、7項目の間で相関を示している。以下は、7項目間の傾向を示したものである。

表9 相関行列（都市部）

	学歴	家族形態	暮らし向き	地域愛着度	健康意識	生きがい感	集団参加数	貢献意欲	生涯現役
学歴	1.0000								
家族形態	0.1505**	1.0000							
暮らし向き	-0.1320*	-0.0990	1.0000						
地域愛着度	0.0776	-0.0054	0.2080**	1.0000					
健康意識	-0.2560*	-0.1331*	0.1957**	0.1530**	1.0000				
生きがい感	-0.1078*	-0.0227	0.2741**	0.3573**	0.3313**	1.0000			
集団参加数	0.2270**	0.0784	-0.1865*	-0.1621*	-0.2437*	-0.3833*	1.0000		
貢献意欲	-0.1071*	-0.0698	0.0798	0.2876**	0.1929**	0.2993**	-0.3253*	1.0000	
生涯現役	-0.2304*	-0.1000	0.1337*	0.1068*	0.2466**	0.3417**	-0.1881*	0.1095*	1.0000

（備考） *印は5%で有意、**印は1%で有意。

- ① 「生きがい感」をもつ人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ② 「健康である」と答えた人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ③ 「学歴」では、高学歴の人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ④ 「集団参加数」を多くもつ人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ⑤ 「暮らし向きに不安を持たない」人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ⑥ 「貢献意欲」をもつと答えた人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。
- ⑦ 「地域愛着度」に関して肯定的な人ほど、「現役達成型」が増加する傾向を示す。

つまり、生涯現役類型と有意に相関している要因は、客観的要因では「学歴」、「集団参加数」が関係しており、主観的要因では「生きがい感」、「健康意識」、「暮らし向き」、「貢献意欲」、「地域愛着度」が関係していることがわかる。

しかし、この要因間の比較だけでは都市部の生涯現役づくりに必要な要因を明確にすることができない。そこで、農村部の要因連図を求めたものが表10である。

まず、都市部と農村部の比較から、都市部の方において相関係数の高いものを探ってみると、都市部では「学歴」、「家族形態」、「暮らし向き」、「健康意識」の箇所の相関係数が農村部に比べて高くなっている。それに対して農村部では、「地域愛着度」、「生きがい感」、「集団参加数」、「貢献意欲」の箇所が都市部に比べて高くなっている。農村部では生涯現役類型の基盤となっている「就業」（「就労」）をしている人が多い。そのために生涯現役類型の相関度が高かった。都市部では、都心地域で商工業の就業率が高いが、郊外地域ではサラリーマンの退職組が多いので、どうしても就業率が低くなる。これが生涯現役類型の相関度を低くしている理由である。それと農村部で高い、いまひとつの要因は、コミュニティの結合度である。この要因により地域愛着度や団体参加数の多さが生まれるので、どうしてもこの種の要因が都市部では農村部に比べて低くなるのである。これに対して都市部では、高学歴者が多く、暮らし向きも「良好」とする人も多くなるので、こうした側面が生涯現役類型と相関することになったのである。

表10 相関行列（農村部）

	学歴 (新)	家族形態	暮らし向 き	地域愛着 度	健康意識	生きがい 感	集団参加 数	貢献意欲	生涯現役
学歴（新）	1.0000								
家族形態	0.1160*	1.0000							
暮らし向き	-0.0862	0.0500	1.0000						
地域愛着度	0.0872	-0.0721	0.1935**	1.0000					
健康意識	-0.0917	-0.0811	0.1926**	0.1155*	1.0000				
生きがい感	0.0978	-0.0329	0.2231**	0.3822**	0.2404**	1.0000			
集団参加数	0.1261*	0.030	-0.0638	-0.2164*	-0.1538*	-0.3474*	1.0000		
貢献意欲	-0.0802	-0.0026	0.0959	0.2977**	0.1802**	0.3903**	-0.4270*	1.0000	
生涯現役	-0.1004	-0.0204	0.2342**	0.2421**	0.2728**	0.3732**	-0.3250*	0.2552**	1.0000

（備考） *印は5%で有意、**印は1%で有意。

5. 生涯現役社会のための形成とリーダー育成

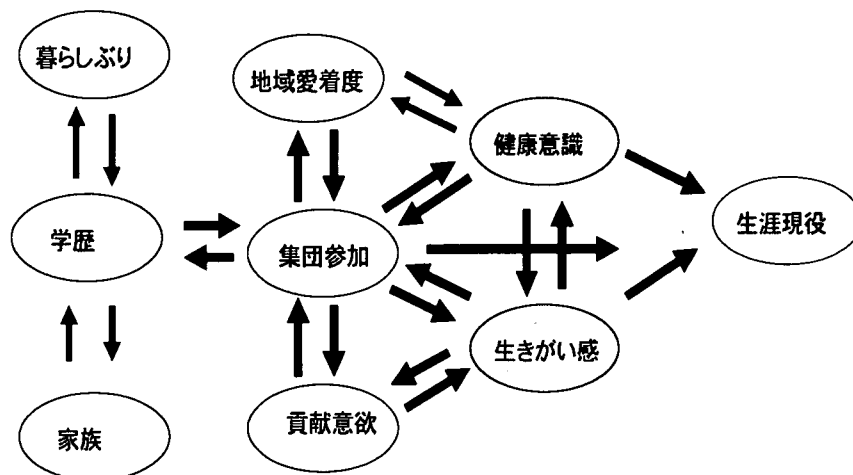
以上の9つの要因は生涯現役を支える重要な要因であると考えられるが、ここで

生涯現役社会のシステムを形成するにはどのようなことが必要か考えてみたい。

5-1. 生涯現役要因の連関図

図6は、生涯現役社会のシステムを構築するための見取り図と考えていいもので、左側に個人のもつ経歴、家族、そして経済基盤がある。これは基本的には個人の生活を可能とする重要な生活基盤となるものである。この上に地域社会の地域愛着度、集団参加、貢意欲（何かに役立ちたい）を置き、そしてこれらの上に意識としての「生きがい感（働き甲斐も含む）」と自分自身の「健康意識」を配置している。右端の「生涯現役」は当然「元気高齢者」である。

図6 都市部の生涯現役要因の連関構造



もちろん、この図の「生涯現役要因の連関構造」は、都市部における生涯現役要因として代表的なものを抽出しただけで、全ての要因をみたものではない。生涯現役（「生涯現役者」）を形成するための代表的要因の連関をみたものにすぎない。だからといって決して不十分だとは思わない。重要な要因の全てを取り込んでいるからである。その意味では、この図は「生涯現役」を生み出す「生涯現役社会システム」と呼んでよいかもしれない。この「生涯現役要因の連関構造」は、行為論的な見方から探ったものである。したがって外部のシステムである行政や企業や学校や団体などといった各種の機関が働かなければ、全体としての生涯現役社会づくりが作動しないことは言うまでもない。

ところで、以上の要因は、どのような連関をもっているかといえ、生涯現役には、まず、「健康意識」と「生きがい」が大切で、「健康意識」と「生きがい感」が

「生涯現役」と結びついており、それに「集団参加」のような団体活動やコミュニティ活動が重要な要因となっていることを指摘しておかなければならない。そして、インフラとしての「家族」、「学歴」、「暮らし向き」は、相互に関連しており、暮らしの安定が地域活動を盛んにし、さらには生涯現役に結びつくし、家族は拡大家族のような家族機能の豊かな家族で集団参加は生まれやすく、生涯現役が増大する。ただし、拡大家族が都市部において成立するのは商業・工業の自営業において期待できるが、サラリーマン家族ではなかなか難しい。したがって今回の調査でも、「学歴」が生涯現役と結びついたのである。

以上の他に都市部と農村部の比較から出てきた特徴も考慮に入れると、今回の調査では「学歴」と「健康意識」が強く影響していることを指摘しておかなければならないであろう。都市には高学歴層が多く、しかも健康意識において「良好」と答える人が多いということである。自然の豊かな地域で生活する農村部の居住者に自身を「健康」と答える人が多いというイメージは間違いで、いまや健康な人は都市部の居住者の方に多いことを認識しなければならない。

5-2. 生涯現役リーダーの養成のために

それ故、都市部で生涯現役社会づくりをしていくためには、この関連図を考慮に入れて考える必要があるであろう。

次に、生涯現役社会づくりのためには、どのような方策が望まれるか考えてみたい。今回の調査では、都市部における生涯現役者リーダーの養成要因を目指していた。そのためには、都市における生涯現役類型として、①地元商店街の生涯現役リーダー類型、②企業退職者の生涯現役リーダー類型、③企業退職者後のIUJターンからの生涯現役リーダー類型、④地域コミュニティ活動からの生涯現役リーダー類型、⑤生涯学習への参加からの生涯現役リーダー類型、⑥社会参加の延長での生涯現役リーダー類型を想定していた。

これらの類型は、地域別と退職別とを組み合わせると考えたリーダー類型である。一般に都市には「商店街」が多く集まり都心の地域、商店街ではないがそれに隣接する古い「市街地住宅地」、そして郊外の「新興団地」のような住宅地、そして工場近くのアパートと古い家屋が密集する「工業住宅地」、近郊農村に隣接する「都市近郊地」などが形成されている。

図7 都市地域の地域活動の見取り図

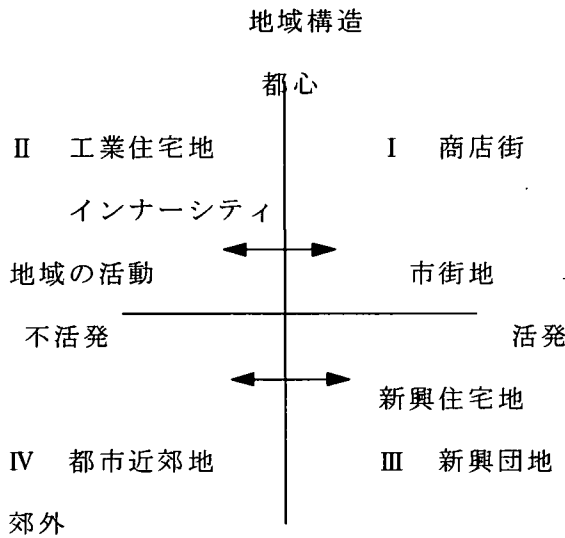


図8 生涯現役リーダーの出現

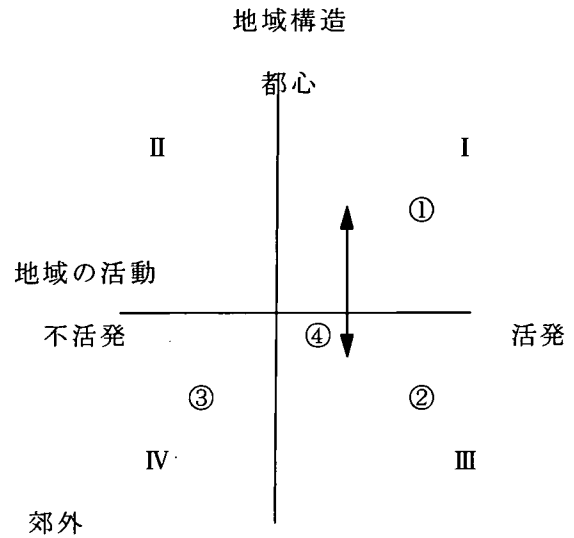


図7と図8は、縦軸は都市の地域構造で、空間的な位置関係で「都心」と「郊外」に分け、さらに横軸として地域活動が「活発」か、それとも「不活発」かを区分している。図7は、その中でどのような地域が該当するか、位置づけたものである。市街地と新興住宅地の矢印は、地域活動が「活発」なケースもあれば、「不活発」なケースもあることを示す。これに対して図8は、生涯現役類型の出所となりやすい箇所の上のリーダーを位置づけたもので、どこまでも可能態として位置づけている。⑤と⑥はどの地域からでも出現するので位置づけていない。

そこで、上で想定していた6つの生涯現役リーダーを説明すると以下のようになる。

①地元商店街の生涯現役リーダー類型は、商店などの経営者がリーダーになるタイプで、単に④のように、地域の自治会の役割以外に、商店街の固有の、活性化の課題も抱えている場合が多い。

②企業退職者の生涯現役リーダー類型は、サラリーマンを退職した後「生きがいづくり」や「自分探し」や「社会的使命」でリーダーになるタイプで、多くは仕事で得た技能を生かしてリーダーになる場合が多い。

③企業退職者後のIUJターンからの生涯現役リーダー類型は、仕事の関係で地域を離れていてIUJターンとして地域に関わるようになってリーダーになるタ

イブである。このタイプは、専門性や指導性をもっていることによってリーダーになる場合が多い。

④地域コミュニティ活動からの生涯現役リーダー類型は、自治会や町内会への熱心な活動の中からリーダーとなるタイプである。このタイプになるには、地域への関心や住みやすい環境づくりを目指してその役を引き受けるかの大半である。老人クラブや子ども会育成会や防犯ボランティアなどと連動して動くことになりやすい。

⑤生涯学習への参加からの生涯現役リーダー類型は、生涯学習で学んだ知識や技術を生かすために活動を開始し、結果としてリーダーになるタイプである。NPO活動、ベンチャー企業のようなものにつながる場合もある。

⑥社会参加の延長での生涯現役リーダー類型は、県外からの来住や退職後による新しい「生きがい」の発見のためであったり、「孤独さ」に陥らないために集団参加を行い、それが昂じてリーダーになるタイプである。活発な女性がこのタイプにはなりやすい。

表 1 1 年代別の活動性と志向性

	集団活動	地域活動	暮らし向き （「心配ない」）	高齢期の志向性	自我像
40歳代	地域コミュニティ活動、非参加者が多い、自己啓発活動	お祭りや運動会、学校行事	73.3%	家族の結びつき (1位)	新しい知識の受け入れ(1位)
50-54歳		講の集まり	66.7% 多少心配(28.9%)	時間的ゆとり志向 (1位)、知識を生かす生活志向(1位)	
55-57歳	非参加者が多い (1位)	非参加者多い	76.7% 全く心配なし(20%)	経済的ゆとり (1位)、精神的ゆとり(1位)、自然志向(1位)	生活は向上する (1位)
58-60歳	自己啓発活動	近所の葬式の手伝い地域共同作業	70.3% 非常に心配(13.9%)	仕事志向(1位)、 社会のために役立つ(1位)	何かに役立ちたい (1位)、自己存在満足度(1位)、自己能力発揮度(1位)
61-64歳	ボランティア活動		69.4% 非常に心配(13.9%)	健康な生活志向 (1位)	社会的貢献能力 (1位)
65-74歳		町内会などの活動、お堂の掃除	72.4% 多少心配	仲間づくり(1位) 、健康な生活志向 (1位)	自分の体力には 自信がある(1位)
75-84歳	ボランティア活動、地域コミュニティ活動	町内会などの活動、地域の共同作業	86.7% 全く心配なし(25%)	趣味志向(1位)、 農林業志向(1位)	生活満足度(1位)

5-3. 年代別行動パターンからのリーダー育成

では、具体的にどうすればよいであろうか。ここでは年代別行動パターンからリーダー像を考えてみたい。まずそのために年代別の行動パターンに注目してみたい。

表11は、7区分の年代毎に集団活動、地域活動、暮らし向き、高齢期の志向性、自我像にその特徴を列挙したものである。

この表を参考にして各年代のもつ特徴から都市地域のリーダーの可能性を考えてみたい。以下、これまでの各年代の行動パターンや自我像などを考慮に入れて、各年がどのようなリーダーとしての方向性をもつのかを素描してみたい。いうまでもないが、全員が「なれない」とか、「なれる」ということをいっているわけではない。今回の地域の分析の中からこのような可能性があるというレベルで示唆しておきたい。

(1)「40歳代」は、実際には仕事や子育てで忙しいためにリーダーになるのは難しい年代である。だが、「新しい知識の受け入れ」がトップであるということ、そして高齢期志向では「家族の結びつき」をする姿勢をもっているということを経験に入れるなら家族との接点を題材にした、生涯学習型のリーダーに向いているであろう。

(2)「50-54歳」の年代は、「元気」な性格を掘り起こす作業の中では、リーダーとして積極的に進めるべき特徴はあまりみあたらないが、「時間的ゆとりのある生活」や「知識を生かした生活」の志向性が強いので、こうした特徴でのリーダーには期待できるのである。

(3)「55-57歳」の年代は、「生活は向上する」と考えているが、「何かに役立ちたい」と社会への貢献意欲は一番低い。人のためにとという姿勢は低いが、自分が楽しくなるためにとという角度で考えると、力強い力を発揮するであろう。とにかく自然や趣味の世界が大好きであるから、生涯学習の方面でのリーダーとしては申し分のない役割を果たせそうである。

この世代は、高齢期に向けて「経済的なゆとり」や「精神的ゆとり」や「自然志向」を強くもっており、団塊後の地固めの役をするのであろう。ともかく、集団参加を嫌う世代で、これを切り替えて、積極的に集団に向かうようにすることが大事である。

(4)全体的にみると、一番意欲的な年代は「団塊の世代」であることがわかる。